



北海の古平風土物語 (五七)

難所の峠道も昔がたり 国道229号線の開通

高橋源五口

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
第九十号(毎月一日発行)
平成九年三月一日

■一年峠の難所

自動車道路としての改修工事は続けられたが、山道を余市まで行くにはなお三つの峠を越えなければならなかった。坂道が急で、おまけにカーブがあまりにも多かった。一年峠、とか一年曲がり、と呼ばれて、道内でも有名なほどの交通の難所であった。それなのに当時は、交通事故故らしいものは全くなかったようだ。

戦時中は、バスはガソリンの配給がないため代わりに木炭バスが走ったが、木炭バスでは余市山道を走れる力がなかった。余市までのバス路線は休業となった。それでも積丹方面の

路線を走ったが、山道にかかるとやっと走っていた。

■海岸道路の建設

戦後間もない頃、古平・余市間海岸道路の計画ができて、沖村のセタカムを抜けるトンネルが掘られ、崖下に道路の建設が始まったのである。

「あんなところに、ほんとうに道路ができるんだろうか？」というのが実感だった。その道路建設の様子を、沖を通る定期船から見ていたものだった。

昭和三十三年、十年がかりの難工事の末海岸道路がついに完成し、国道二二九号線として、この積丹半島の住民に大きな恩恵をもたらしたのである。

これによって所要時間が大幅に短縮され、大型バス、トラックなどが年中無休で運行できるようになった。余市までの距離も十三キロと今までの半分に短縮され、小樽や札幌への日帰りも楽になり、かつての陸の孤島のイメージは大きく変わったのである。

この積丹ラインは、国定公園の地域の産業、経済の流通はもとより、文化の大動脈となり、地域の人々は大きな恩恵を受けることができたのである。

戦後、表積丹地方の交通の発達にはめざましいものがあり、三

◆曹谷(宗谷)で

越年のこと

曹谷で越年をするときは寒気をしのぐため、厚い板でたたみ一枚ほどの大きさを、高さ約三尺(約一メートル)ぐらいのキツという箱を作る。中に笹の葉を厚く敷き、その上に熊の皮を敷いてからふとんを敷いて寝るが、中から

アイヌの[ことわざ]

世間ばなし集]から

◆箱にふたをして寝る。

◆魚油のこと

蝦夷地にはいろいろな魚油があるが、中でも赤鱈(アカエイ)の油は灯油には最も良い。薄い黄色だが、夜これを使うと妙に目が疲れないというので珍重され、また味も良いという。次にオットセイの油だが、白く澄んでいてこれも良しという。

十数年前までの道中の苦勞など忘れられ、まるで夢のように思われる。この地方の沿岸の交通を長年支えてきた定期船も、小樽間の運賃積み船も無くなり、今では私どもの語る、懐かしいむかし話として残るだけになってしまった。

しかしこの道路の完成までには、十人をこえる工事に関連して犠牲者があつたように聞いている。犠牲者を弔う墓石なども建っているが、この地域の人々は長く感謝の意を捧げ、供養を忘れてはならないことだと思っている。

■マンガン鉱石の生産高
 稲倉石鉱山では新グリナワルト
 炉によって鉱石を焼いた結果、
 鉱石の生産が上がったこともあ
 るが、鉱石の品位が高まったこ
 とによって生産額は上昇した。

昭和十年頃は鉱石の
 品位も三十三%ぐらい
 あったが、戦時中の乱
 掘がたたり、二十年に
 は二十%を切るほど品
 位が下がっていた。戦
 後は需要が少なくなっ
 たため品位の高い鉱石
 を掘っていたが、生産
 高は二十年の百分の一
 ほどであった。(約三
 八〇トン)

その後、市場の好況
 に支えられて増産した
 もの、品位は下がる
 一方であった。そこで
 新しい炉で鉱石を焼くことによ
 り、三十五〜四十%をこえるほ
 ど品位を高めることができたの
 である。

この間にも立坑を掘り進めた
 り新式の掘削機などを導入し、
 昭和三十四年九月には、六三〇

— 百年の歴史を閉じる —

稲倉石鉱山 (11)

〇トンを処理できる浮遊選鉱場が
 完成した。
 ■鉄鋼業界の不況で
 経営の合理化

国の基幹産業である鉄鋼の生産
 が飛躍的に伸びたが、東京オリ
 ンピックが終わる頃から需
 要が減り始め、特殊鋼にそ
 の影響が大きかった。それ
 を反映してフェロアロイの
 消費量も減少した。

それに加えてフェロアロ
 イを生産する新会社がいく
 つか出来たことや、輸入の
 自由化による価格の引き下
 げなどが重なったこともあ
 って、鉱業所は経営の合理
 化に乗り出した。

■名物の索道もついに廃止
 稲倉石鉱山では、これまで
 輸送の主役であった索道を
 廃止することに決め、すべ
 てをトラック輸送に切り代える
 ことにした。これは索道のワイ
 ヤーロープ二万六千メートルの寿命
 がきていること、索道輸送費が
 トン当たり五〇八円を要するの
 に、トラックではトン当たり三
 〇〇円と輸送費に大きな差がで

きたことなどがその理由であつ
 た。また、町がブルトーザーを
 購入し稲倉石鉱山までの除雪を
 始めたので、冬も車の通行がで
 きるようになったためである。
 鉱業所では、港町の貯鉱場まで
 トラックが上がるように百八
 十メートルの道路も新設した。
 昭和九年九月、第一索道とし
 て元山から堤の沢までの五ギヤ
 ルが運転されてから三十一年、
 一日の輸送能力二百トンを誇つて
 いた索道も、昭和三十九年十二
 月十九日をもってここに運転を
 終えたのである。

■保安優良鉱として表彰
 昭和三十九年六月、稲倉石鉱山
 は三百七十万時間以上死亡事故
 の無い保安優良鉱山として、札
 幌鉱山保安監督局長から鉱山特
 別賞を授与された。また、次の
 二名が個人として表彰された。
 ・保安優良
 上級保安技術員 青柳 泉
 鉱山労務者 赤松信雄

この受賞のあと同年十月、東
 京都立体育館で総理大臣・労働
 大臣らの出席のもとに、中央労
 働災害防止協会から緑十字章が

青柳泉所長に授与された。北海
 道からただ一人という名誉ある
 表彰であった。
 さらに、昭和三十八年から始
 めた災害減少五年計画の目標
 達成鉱山として、同四十三年の
 開道百年を記念して、七月十日
 再び札幌鉱山保安監督局長表彰
 を受けた。

この表彰のかけには会社はも
 ちろん、学校・婦人会をふくめ
 た、地域ぐるみの保安に対す
 る理解と協力がその支えとなつて
 いたのである。

▼マンガン鉱石の生産高▲
 年 度 採 掘 量
 昭和4年 300トン

5	1、118
6	180
7	2、360
8	2、420
9	8、893
10	13、736
11	19、095
12	22、458
13	27、684
14	25、922
15	30、304

← (次ページ下段へ続く)

忘れられていく
素朴な自然の味わい

福 井 幸 平

古平はどこを歩いてても、必ずすけそを軒に吊している風景がなんとも漁師町らしく、ほほえましい。

珍しくなったがガンジ(ワラズカ)も時々お目にかかることもあり、食べたいなあ?と思いつくこともある。カマボコの原料として貴重なガンジも、だんだん少なくなっているようだ。

身欠鯨にしても、するめにしても、鰯、その他、乾かしたものを叩いて食べた、噛んで食べたりの習慣も少ない。

今の子どもは、なにかたくましさとか、自然の本当の味覚から離れてゆくように、可哀想な気がする。一袋いくらの乾物の味はみな

同じよう素朴な、個性のある味でなく、加工されたものばかりで閉口する

この頃は老いたせいか、自然そのままを食べたい。山菜のほかに金蓮花、ニセアカシヤの花、菜の花、タランボの芽等々。最近ランの花を、巨人軍の長嶋監督が食べているスポーツ雑誌を見て驚いた。花でも、特に毒でもないものは食べられるようだね。

長島監督のあき子夫人はどうして食べさせているのか確認していないので解らないが、多分、生で食べているのかも知れない。

さてさてまねしてみようかなあ?



▼坂ッペラでそり滑り

昔、子どもの頃の冬の遊びといえばスキー、そり滑りが断然多かった。琴平神社に向かって左側の通称太(屋号でダイサン)の丘がいいスキー場で、そりは新地分教場(ふるびら温泉)の通学路の坂が人気があった。

さて、一般に坂のことをなぜか「坂(さが)ッペラ」と、坂にペラをつけて言う。「ペラ」にどんな意味がある

古平の地名

《 5 》

のか不思議に思っていたところある本で、函館でも坂のことを「坂ッペラ」とか「坂ッピラ」と普通に言っているし、このような言い方はずいぶん各地でも使われている、と書いてあるのを見た。

そして青森では、急な坂のことをヒラと言う人がかなりいることも分かったという。

アイヌ語のピラが崖のこと、を意味し、日本語のヒラも平らな所ではなく、崖や坂のこ

(前ページより)
年 度 採 掘 量
昭和16年 40、353ト

17	41、257
18	63、357
19	113、446
20	34、719
21	345
22	379
23	4、406
24	10、821
25	15、353
26	26、152
27	23、912
28	18、624
29	25、500
30	32、439
31	51、115
32	63、544
33	63、951
34	70、369
35	76、947

(鉄興社三十五年史より)

とを意味する地名になりそうだと書いています。

子どもの頃何気なく使っていたことばにも、古平の語源が隠されていたようである。

遙かなる故郷の思い出

[30]

古平の不思議？

橘 義我 春

— 第一話 —

◆おがる石の話

小学校高等科一年の時、同級生の小林吉太郎君と渡辺与吉君の二人から、なんとも不思議な話を聞いた。

浜中（今の浜町）とか土場とか言っていたが、古い話なので記憶があいまいだが――。

その話によると『おがる（大きくなる）石』がある、というのである。はじめてこの話を聞いたときは半信半疑であったが、二人ともうそをつくような人間ではない。話も断片的にしかな覚えていないが、なんでも古平のある漁師の網に、人間の頭蓋骨がかかったことがあったそう。信心深い漁師はその頭蓋骨を家に持ち帰り、頭蓋骨を両側の石ではさんでお墓にし、ねんごろに弔い、祠（ほこら）も建てたそうである。

ふしぎ！

ところが、頭蓋骨を挟んであった石が年々おがって（大きくなって）、祠の天井ようまでとどいてしまい、祠の建て直しをしたというのである。

私は、この「おがる石」をぜひ見てみたかった。小林君と渡辺君の二人が、学校の休みの日

英霊として

祀られた人と思う

渡辺ハツエ

戦中派の私は時折軍歌を口ずさみ、言いようのない悲しみを痛憤します。

昭和十六年に大東亜戦争（のちに太平洋戦争）がはじまり、多くの戦士たちは祖国の礎となる覚悟をもって、肉親と別れ、故郷の人たちに激励されて戦場におもむきましたが、奮戦もむなしくついに敗戦の憂き目を見

にそこへ案内するという。その日は、まず私が禅源寺の通りにある小林君の家に行き、それから二人で渡辺君の家に行くことにした。

さて当日になったが、その日は雨、風の強い大嵐となった。台風だったのかも知れない。

次の日、学校で次回の「おがる石」を見に行く予定を話し合ったが、秋であったので、この時期はどこの家でもジャガイモ掘りと運搬で忙しく、学校が休みだとみんな子どもを当てにし

ることになりました。中には祖国の勝利を信じながら、散っていった多くの方がおります。

私の亡夫の弟も、昭和二十年八月十日、沖繩の激戦地で戦死しました。二十五歳の青春の真っ盛りでした。

兵役で旭川の連隊に入り、出征の時には亡き父が旭川まで見送りに行きました。当時、父は

ていた。なにしろジャガイモとカボチャが主食のような時代だったので、子どもも休みだからといって遊んでもいられなかった。

とうとう「おがる石」は見ることが出来なかったが、今でも「惜しかったナ」という思いはある。

古平のどなたかでも、もしこの「おがる石」のことを知っているか、また、見たことがあるという方はお知らせ下さい。私も、その不思議な「おがる石」なるものを確かめたいし、ビデオに撮っておきたいと思っっている。心あたりの方はよろしくお願ひいたします。

（東京都小金井市在住）

半身不随の体で杖をたよりの日常でした。出発の時に弟は汽車の窓から身をのり出して、父親の肩をしっかりと抱きかかえ、「達者でいれや、俺も元気で行くからね。」

と、最後の別れをして行ったことを、亡き父は涙ながらによく
←（次ページ三段目へ続く）

富山の薬屋さん

竹内ことと

◆薬屋さんの風船

私たちの小さい頃は、毎年二回は富山県から薬屋さんがやって来ていました。家に来ると母は、たんすの上から薬箱を持ってきて薬屋さんに渡します。すると薬屋さんは丹念に調べてから、また新しい薬と入れ替えて行きます。使った薬の代金によって、景品として風船を置いていってくれるのですが、私の家のように子どもが大勢いるところでは、ボサツとしていると当たらないこともありました。

風船は四角いのが特徴で、きれいな絵柄のものがいろいろありました。学校へ行って風船つきをしていたら、ほかの人がやはり薬屋さんから貰ったと言っていて、パラピン紙で作った丸い風船を持っていました。とつても軽そうできれいなので「いいなあ……」と思いました。

「来年薬屋さんが来たら、今度あんなのを貰おう」

薬屋さんの来るのがとても待ち遠しく、また楽しかったのをおぼえています。

のちに風船はお箸に代わりました。それを母は、子どもたちのお正月用としてとっておいてくれたのです。

昔の懐かしい思い出話です。
◆手作りの風車

やはり、子どもの頃のことです。何人か集まって風車作りをして遊んだことがあります。

お金があれば買ってそれですむことですが、買って貰うことができませんでしたので、ほかの人の持つている風車を見て作りました。

まずはがき、豆、くぎ、細い竹、それにクレヨンを用意します。はがきは正方形に切って、四すみから真ん中に切り込みを

(前ページ下段より続く)

私たちに聞かせてくれたのが、昨日のこのように思い出されます。これが、父親と息子の今生の別れとなってしまったので

靖国神社に祀られるはずの戦士たちも、今では総理大臣の公式参拝もままにならないばかりか、旭川の護国神社も国からの補助は一切打ち切られて、神社の維持にも大変な苦勞をなさっていると聞いています。

考えてみますと、日本の国は世界で一番平和で、治安の良い国だと信じています。今、こうして私たちが安楽に暮らしてい

入れ、切った四すみの片一方の角を四つ真ん中に集めます。集めた四枚と、四角い紙の真ん中にくぎを通し、くぎの出たところへ、はがきを押さえるのに穴をあけた豆を通してやります。廻りやすいように、くぎを竹の穴に差すと出来上がりです。

出来た風車を自分の方に向けて、フーと息をかけるのとくると廻ります。その風車に、ク

のことを思い、それらの人に何の罪があったのかと憤りをおぼえます。

明治天皇は、「戦死者を護国の神」としてその靈にご参拝されましたが、今の政府は、戦犯を祭神から下ろさないと参拝できないと言っています。

私は、教育勅語を学んだ戦中派です。

日の丸を仰ぎ、「君が代」を歌って余生を過ごしたいと思っています。



レヨンで模様を描くとなおきれいです。

すっかり出来上がったところで一斉に走り出し、その出来栄を確かめます。少しでも風があると、だまっけていても勢いよく廻り、大変きれいでした。

昔の人はこうして兄や姉、友だちが集まって、ものを作る喜びを教えられながら成長したのです。

岬短歌会詠草

車のわだち深く残るをなづみゆくに降り来る雪はみぞれに変わる
 北見先生の八十二歳の誕生日誰かが歌ひき月の砂漠を
 凍てし夜にきらめく光る星を仰ぎたり逝きにし父を母を思ひて
 病院の待合室は人少なし浜は助宗大漁といふ
 朝日受けし氷柱虹色にきらめきて滴しきりなり臥す窓の辺に
 ふる里の母のみ墓に侘助の咲きあるらむか忌の日近づく
 壁の暦に三月休みの予定記し正月終へて孫は帰りゆく
 フリージャを雪柳の枝にくみ入れて活けたり春の香り漂ふ
 月に向かひてほうと吹きかくる白き息ひろがりぬ現にぞ見ゆ
 ボサボサと名付けし鴨が餌台に大きくなりてこの冬来たり
 人々の来たりて吾が家の厨への雪とりくれつ感謝して居り
 大事故ありし豊浜トンネルは目を閉じゆくに逝きし二十名浮かぶ切なく
 参道の除雪を終えて夫脱ぎし防寒着より湯気立ちのぼる
 正月の花と活け替ふスターチス南の島より送られ来しとぞ

竹内コト
 長崎フユ
 金杉すみ
 櫛佳代
 菅原節子
 東美知
 鈴木時子
 堀典子
 堀昭子
 丹後初江
 水口キエ
 池田テル
 山口スエ
 轟木富美子

古平ホトトギス会

落鮎の雨に打たれて流れゆく 越野清治

ペーチカの団欒に燃え更けにけり

寒干のすけそつらなる港町 福井久美子

一月の行事書き込むカレンダー

病院の消灯あとの夜長かな 仲谷美砂

故郷の近くて遠き星月夜

落葉ふむ卒寿の試歩もお寺まで 水見句丈

雪虫や空気動いてゐる籠まがき

病床に娘の活けくれし水水仙 大島喜恵

孫等来て鱧鍋囲む夕餉かな

雪間よりこの世のさまを覗くりス 斉藤波留

稚魚放つ古平河の水ぬるむ

闘病の妻に夕餉の鯨焼く 越野敏雄

ベランダに鶴やまの声する床の中

闘病の甲斐あり春の帰宅かな 越野スミ子

冬景色病床に描く夢の彩

徘徊はいかいの妻にマフラー見立てやり 仲谷比呂子

下校の児つらゝ刀に切り合える

春先のまぶしき辻にバスを待つ 山口 浪

窓をあけ目をひくときの白芙蓉

吹雪とも日課の万歩怠れじ 福井幸平

冬空へ横ひとふでの飛行雲

病状の詳しきことの初便り 長谷川和子

寒雀撒餅にさつと応えけり



・あっちゃあちら、おばさん

「あっちゃいげ(行け)！」 「あっちゃいだ(居た)がア」

・あねっこ、あねっちゃん年ごろの娘さん、姉さん

「うじ(ち)のあねっちゃん 嫁さんにいぐんだって！」

・あどはだり食べたり、飲んだりした後もねだる

「なんぼ あどはだりしてもだめだよ」

・あっぱ、あばお母さん、おばさん

・あぶらなぎ水面が動かないで、とろつとした感じの海

・あへらつとばかんと、ぼんやりと(立っている)

「なに あへらつとしてるんだ！」

・あべ、あんべ行こう

「これから 海サあべ」 「いっしょに あんべ」

古平の方言

・あめる、あめで(て)る(食べ物)腐りかけている

「これ あめでるド」 「これ あめくせエな」

・あや中年の女性

・あるベサ、あるべえよ(そこに)あるだろう

・あわくう、あわくつたあわてる、あわてた

「おらあ あわくつたでエ…」

・あんこ若僧、若者

「あれ、どこのあんこだ」

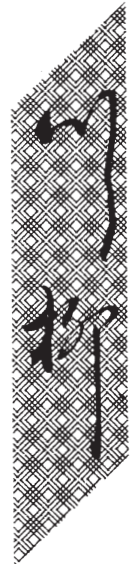
・あんちゃ兄さん、少年 (あんこより親しみがある)

・あんべえ体(機械、仕事など)の調子や具合、味加減

「この頃 どんなあんべえだ」

・あんさま、あんさん兄、若主人、若い衆

「あんさん どっから来たばア」 (初対面の人)



渡辺ハツエ

雪掻きが済んでハミング老いの朝

口ずさむ軍歌涙腺ゆるみ出し

早起きは家計狂わす燃料費

合せ鏡見なきやよかった木の葉髪

石井愛子

吹雪く夜にまた連れて来る孤独感

黒豆に明日の達者を食べている

雪のんのん積み重ねたる齡の数

福井幸平

国会のあたたかすぎて寝ています

